

〈中世〉

お寺の鐘も菜種油も、メイド・イン・住吉だった

住吉は観光だけでなく、産業もさかんでした。約8百年前の鎌倉時代に、堺市の美原区周辺で鋳物作りがはじまり、河内鋳物師と呼ばれた職人たちが全国各地に向けて鋳物づくりを行っていました。ところが7百年前ごろから、現在の堺市から大阪市住吉区にまたがる五箇庄といわれる地域に移り住み、住吉区内の我孫子・苅田・杉本などで鋳物づくりをはじめました。『真継家文書』という古い書物に、鋳物師のムラとして現在の「我孫子」「苅田」「庭井」などの地名が伝えられています。発掘でも山之内元町や杉本2丁目、苅田4丁目で鋳物をつくっていたことを示す鋳型や炉、鉄のかすがたくさん出土しています。

高野山金剛峯寺の銅製の燈台には「住吉郡山

内」の地名が、桜井市の長谷寺の鐘には「住吉郡吾孫子」の地名が見られます。その後、戦国時代に入ると織田信長の代官として堺の今井宗久が五箇庄を治めることになり、鋳物づくりも管理するようになります。

また、日本で最初に油がつくられたと伝えられる遠里小野は、古代から住吉大社のご神燈の油をつくりはじめ、高燈籠のための油もつくっていました。中世は京都の山崎の荏胡麻油づくりがさかんでしたが、その後、菜種油の製法を確立したことで遠里小野や山之内の油づくりがさかんになり、近畿地方でも有数の油産地になりました。遠里小野には「油茶屋」という地名も残り、かつてここで油の取引が行われていたことを伝えています。



海を行く船の目印の役割をはたして
いた住吉高燈籠（住之江区）。右は苅田4
丁目で出土した鋳物づくりの道具

すみよしく
住吉区ゆかりの
キャラクター7
いもじ
鑄物師



すみよしく
住吉区ゆかりの
キャラクター8
せいゆしょくじん
製油職人



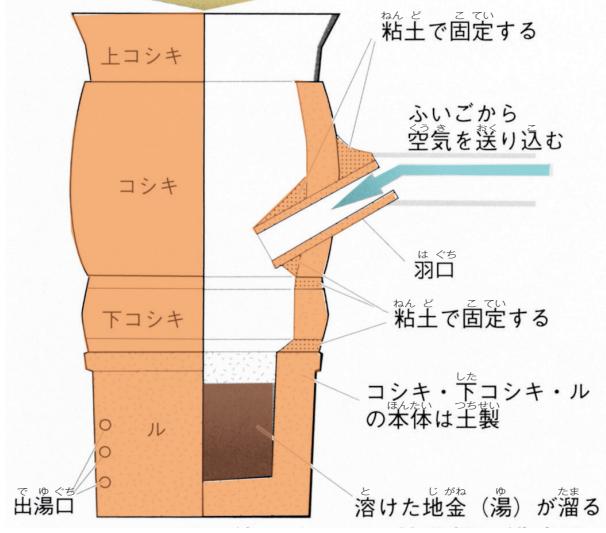
住吉で発展した鑄物の技術

かりた ちようめ はっくつ てつと とろこわ はへん
苅田4丁目の発掘では鉄を溶かすための炉が、壊された破片で
しゅふど もとかたちふくげんとう
出土しました。これらをつないで元の形を復元していくと、当
出しつと とろなかてつ
時、どうやって鉄を溶かしていたかがわかります。炉の中に鉄の
そざいすみいつしょい そふうきくきおくこ
素材を炭と一緒に入れて、フイゴという送風機で空気を送り込んで
こうおかで とくさいとえきじょうご
高温になると、鉄素材が溶けて液状になって、炉の底にたまります。炉の上のほうは壊してしまい、下にたまつた鉄を鋳型に
るうえこわしたてつ いがた
流れ込むのです。鑄物の鍋やさまざまな金具を作っていたよう
ながいものなべかなぐつく
です。鑄物づくりに使われた道具などの出土品は我孫子南中学校
こうないのつかどうくしゅふどひんあびこみみちゅうがつ
校内のアピナ・ミュージアムに展示しています（→P16）。



発掘された鋳造工房施設

じがねすきこうごうせつ
地金と炭を交互に入れて加熱・溶解



溶けた鉄が下に溜るようにした「こしき炉」と
いわれるもの

住吉大社と住吉高燈籠



鑄物師が活躍した山之内元町、杉本2丁目、苅田4丁目

